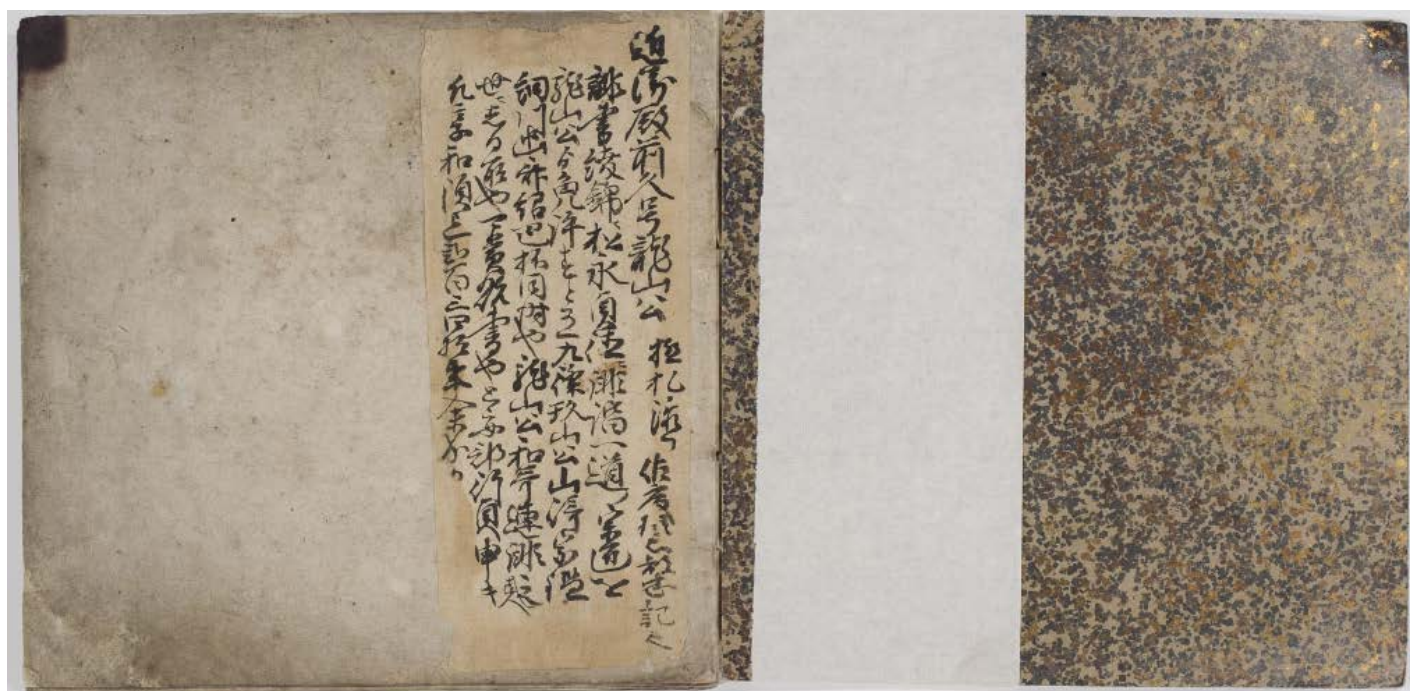




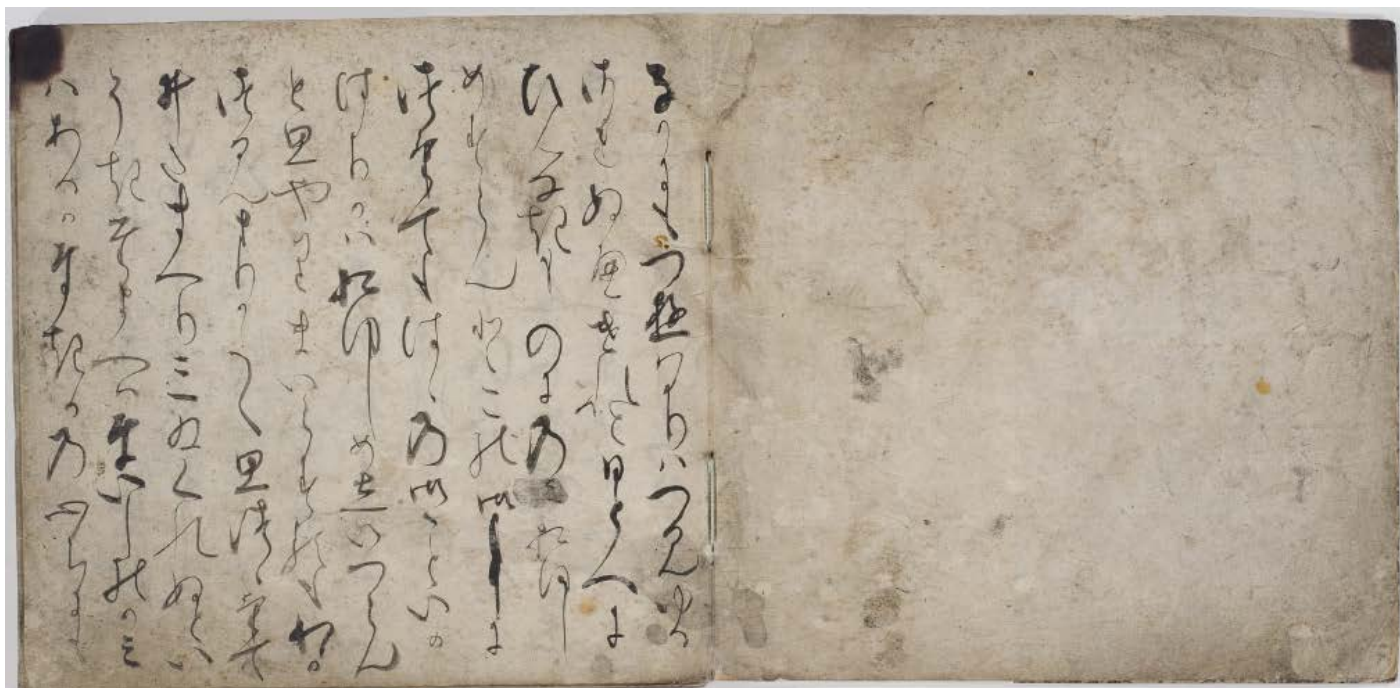
「雫に濁る物語」

表紙

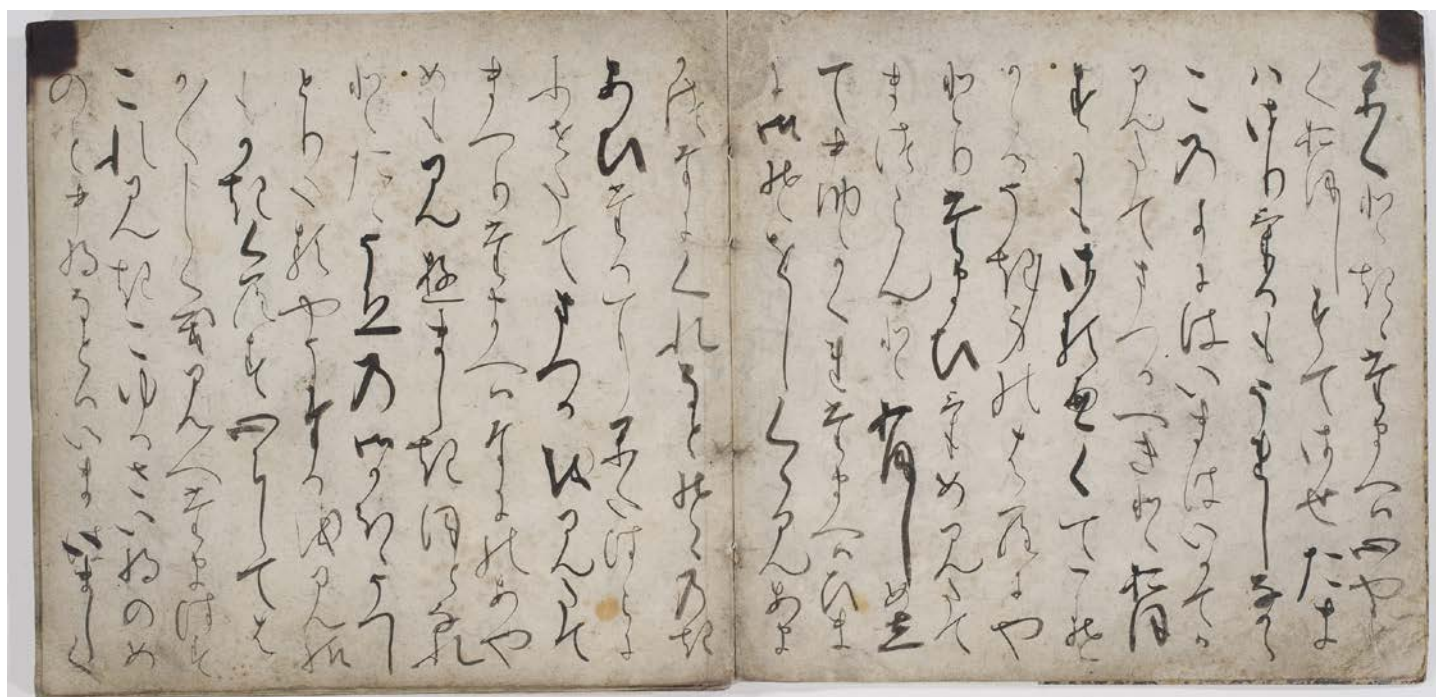


〔貼り紙〕

近衛殿前久号龍山公 極札添 佐藤
 誹所綾錦 松永貞徳誹諧一道ノ宗匠を
 龍山公より免許すと有九条玖山公山崎宗鑑
 細川幽斎紹巴抔同時也龍山公和歌連誹達人也
 世ニしる所也可賞翫書也と安部行貞申キ
 凡享和頃迄約百三四拾束余成か

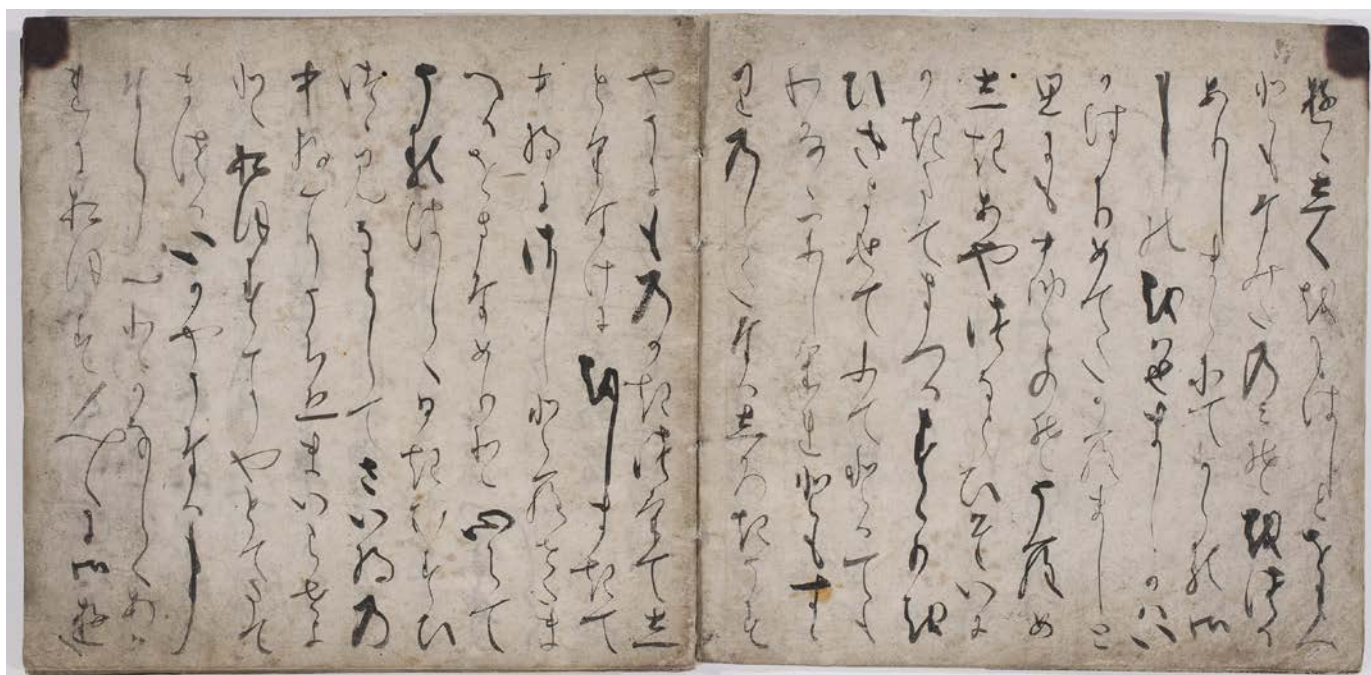


なかにもつゆばかりはつみゆる
 されぬべけれどひとへに
 びんなきものにのみおぼし
 めすらんとこの御事に
 つけてもはゝの御こといか
 ばかりかはおぼしめしいづら
 んと思やりまいらするもわが
 つみさがたく思つゞけて
 いるたまへり三あくれぬとい
 そぎたまへばないしのかみ
 はあるかなきかの心ちにも



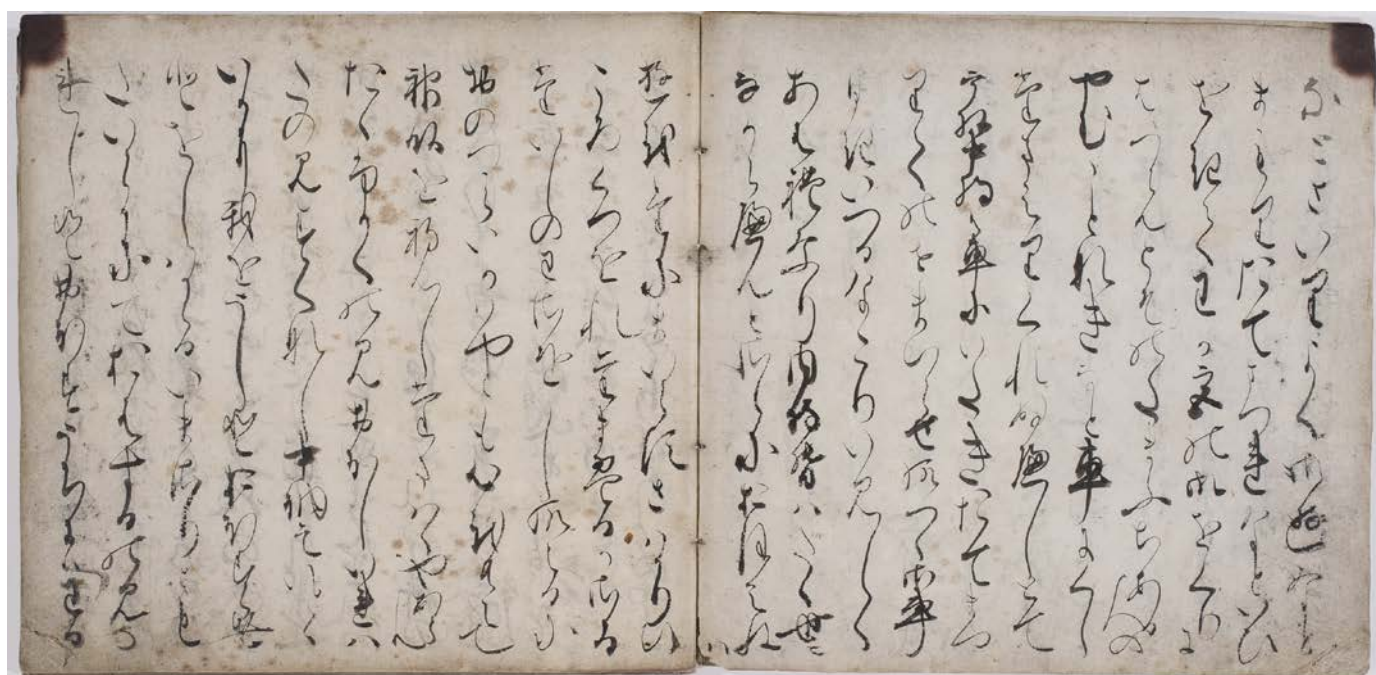
かくときゝたまへば心やす
くおぼしすてさせたま
はざりけるもうれしながら
このよにはいまはいかでか
見たてまつるべきとおぼ
すにもさるべくてこそ
かゝるうき身のはらにや
どりたまひけめ見たて
まつらんとおぼしめし
て中納言かくれたまへばひま
に御ぞをしくゝみあま

がつなにくれなどそゝのき
あひたるにかたはらに
ふせたてまつるを見たて
まつりたまへばなにのあや
めも見ゆまじきほどなれ
どたゞうゑの御かほゝうつし
とりたるやうなるを見給
もかきくらす心ちしては
かばかしくも見へたまはず
これ見きこゆるさい将のめ
のと中将などはいまいしく



ゆゝしくをものはじとをもへ
 どもなみだのみぞをつる
 ありしまゝにてかゝる御
 事のはせましかばい
 かばかりめでたからましと
 思にも中納言どのぞうらめ
 しきあやつなとひたいに
 かきたてまつるすゞりを
 ひきよせてふでとるても
 わなゝかしけれどもすゞ
 りのしたなるしろきうす

やうにものかきつけてし
 どけなげにをしまきて
 中将にさしとらせたま
 へるをさなめりと心えて
 うるはしくひきむすび
 つゝみなどしてさい将の
 中将にうちゑまいらせよ
 とおぼすにやとてたて
 まつるいかやうなる事
 ならんとかなくあは
 れにおぼす人々に御ゆ



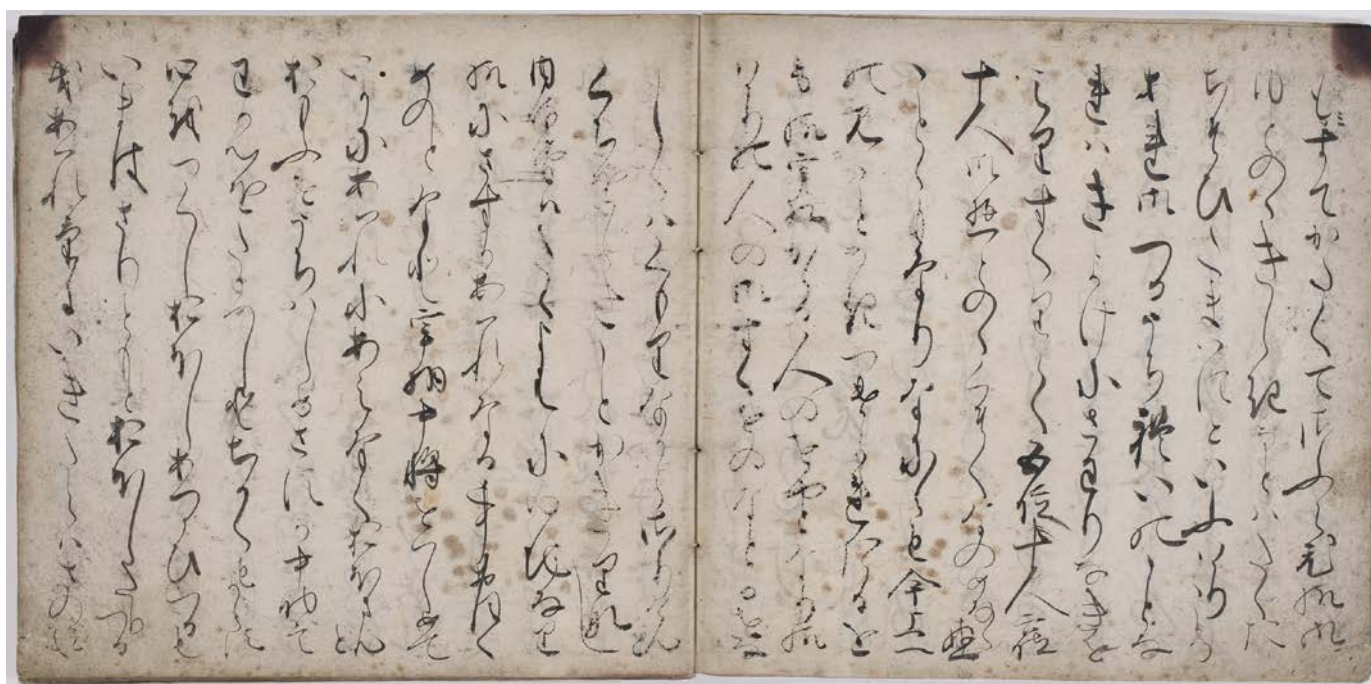
などまいりよく御ゆなど
 まもりたてまつれなどいひ
 をきてわか宮の御をくりに
 はべらんとぞのたまふちある人の
 やむごとなきなど車にぐし
 たまえりくれぬべしとて
 宰相中将御車にいだきたてまつ
 りてのせまいらせ給つゝ御車
 ひきいづるなごりいみじく
 あはれなり内侍督はたゞ世二
 ながらへんとさらにおぼえねば

ゆをだにまいらずさばかりひ
 ごろくづをれたまえるがさる
 だいじのわざをし給えるに
 おのづからいかばやとも心をもえて
 神仏をねんじたまはゞやあらん
 たゞふかくのみおぼしいれば
 たのみすくなし中納言いとゞ
 いかに我をうしとおぼすらむ
 とをしはからるいまさりと
 たいらかにておはするのみう
 れしとおぼすうちにはわか

[illegible]

おのがよゝひきわかれぬる竹のこの
おひしふるねをそれとしらなん
君ならであふせあらじとみつせがは
しでの山ちへ思こそいれ
たゞよはげにとりのあとのやうに

かゝれたるめでたかりしてとも
見えぬにいかばかり思けるにか
と御らんずる御心地なのめならん
やはせめて思あたりける心のうち
をしらせまほしてかきつらん
心の程かなしさにとばかり御か
ほにをしあてゝおはします御
なみだはたきの水などのを
つる心地ぞせさせたまふ宰相
中将はおぼつかなくこもちの事
おぼしやれどわかみやの御こと



も「み」すてがたくてさぶらひ給御
ゆどのゝぎしきなどはただた
ちそひたまはずといふばかりこそ
あれ御つるうちれいのことな
ればきよげさわりなきを

えりすぐりて五位十人六位

十人御ゆどのゝぐそくなのめならぬ

ことゞもなりなにゝも今上一

のみことかきつけられたるを

も「ち」給宰相かゝる人のをやとなり給

ばかりの人の御すくせのなどかをな

じくはくもりなかざりけんと

くちをしきことかぎりなし

内侍督はたゞよはに心地なり

給にさすがあはれなる事おほく

めのとなど宰相中将をはじめて

いかにあはれにあえなくおぼさんと

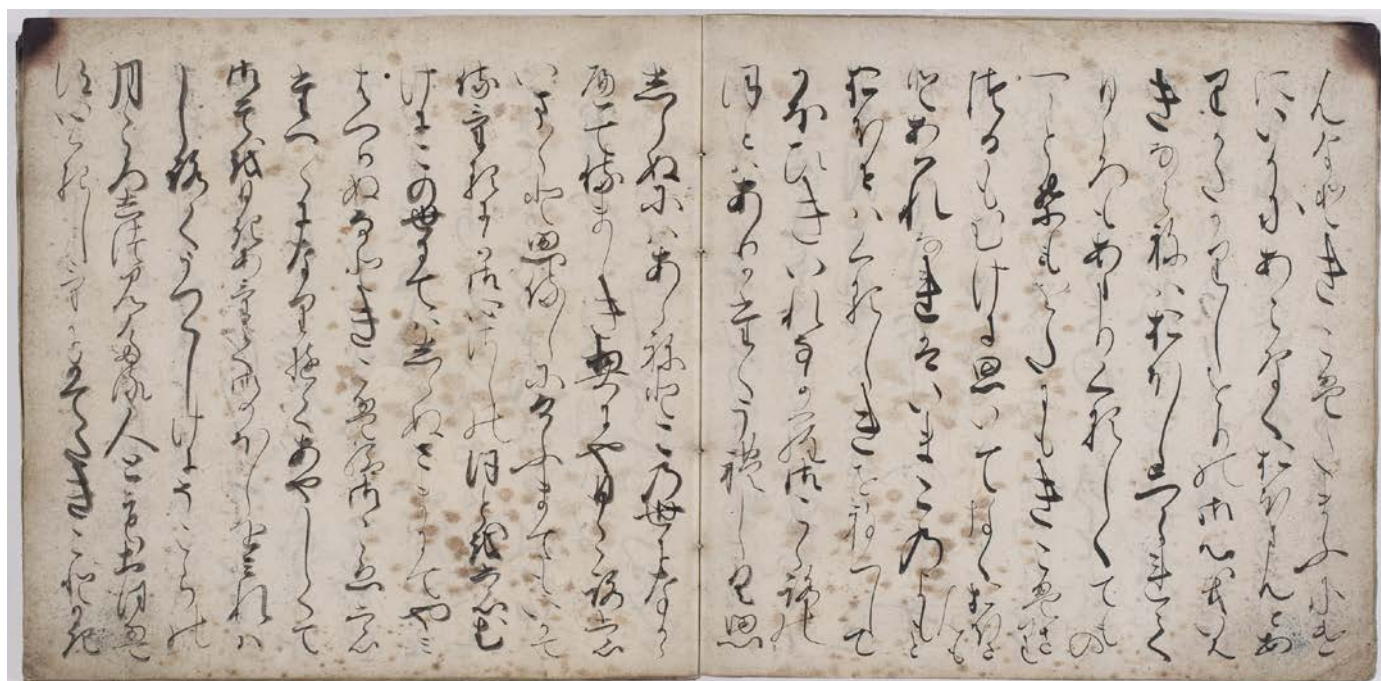
おもふをうちはじめさすが中納言

わが心をたがへじとちかくもよらず

心をつくしおぼしあつかひつるも

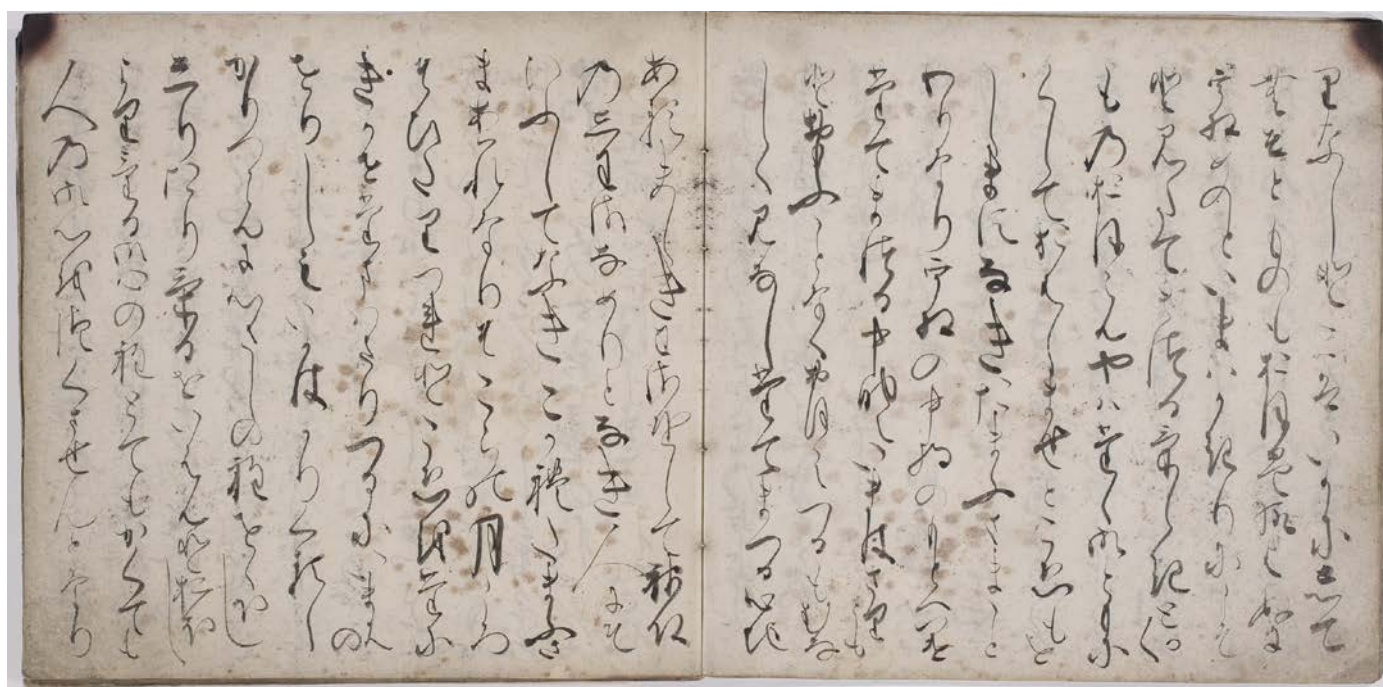
いまはさりともおぼしたるりつる

もあはれげにいきたらばさのみも



んなどきこえたまふにげ
 にかにあえなくおぼさんとあ
 りがたかりしをりの御心もい
 きならねばおぼししられて
 日ごろもあまりくるしくてもの
 一ことはもをだにもきこえざり
 つるもむげに思いでなくおぼさん
 とあはなればいまこのよもと
 おぼせばくるしきをねんじて
 かほひきいれながら御ころの
 ほどはありがたくうれしく思

しらぬにあらねどこの世になが
 へて侍まじき契にや日ごろも
 いまいまと思侍しにけふまでもいかで
 侍けるにか御心ざしのほどをもむ
 げにこの世にてはしらぬさまにてやみ
 はべりぬなどきこえ給御こゑも
 たへだへになりゆくあやしくて
 御ぞをひきあげて御かほをみれば
 しろうつくしげにそこらの
 月ごろしづみたる人ともおぼえ
 ず心くるしげにめでたきことかぎ



りなしとこはいかにして
 むぞとものおおぼえ給はぬに
 宰相めのといまはかぎりにこそ
 と見たてまつるけしきとかく
 ものおほえんやはたゞ御ともに
 ぐしておはしませとこゑもを
 しまずなきたまふさまこと
 わりなり宰相の中將のもとへつげ
 たてまつる中納言いまはさりとも
 とおもふことなくおぼえつるもむな
 しくみなしたてまつる心地

あるまじきわざをして神仏
 のしわざなめりとなき人にそ
 いふしてなきこがれたまふさ
 まあはれなりそこらの月ごろ
 そひたりつれどこゑをだに
 きかせたまはざりつるにいまはの
 をりしもいかばかりくるし
 かりつらんに心ざしの程をゝぼし
 しりたりけるをいはんとおぼし
 よりける御心の程とてもかくても
 人の御心をつくせんとなり

かきぞく くれおがよいこせ
ちねりもみえありすれで
のせふそふたれとらとて
ひとくやとみえふふふ
おちいふたれやいふふ
きととたれとふふふ
さるもりねいふふふ
はる人いふふふふ
おちいふたれやいふふ
らせねとたれとふふふ

はる人いふふふふ
おちいふたれやいふふ
らせねとたれとふふふ
さるもりねいふふふ
はる人いふふふふ
おちいふたれやいふふ
らせねとたれとふふふ
さるもりねいふふふ
はる人いふふふふ
おちいふたれやいふふ
らせねとたれとふふふ

にける人かなとおもふもこの世には
ちぎりもおもはざりけるをのち

の世にだにおなじはちすの露と

むすばゝやとおぼしまどふさままして

おなじ心にあはれをかはしまことのち

ぎりにておはせましかばこの世にも

とゞまり給はざらましと見たてま

つる人々もいとをしき心地どもは

もよをさるゝ心地ぞしける宰相

中将はわか宮の五夜七夜の程はさぶ

らはせ給へとおぼせられわれもさおぼし

つるにかくときゝ給にものおぼえ

給はんやは心もあはたゞしくうちにか

うかうとそうしてまかで給をきかせ

給御心いまはさはよそながらだにき

くまじきにこそとみつせがはの

わたりにわれもいそぎいかまほしく

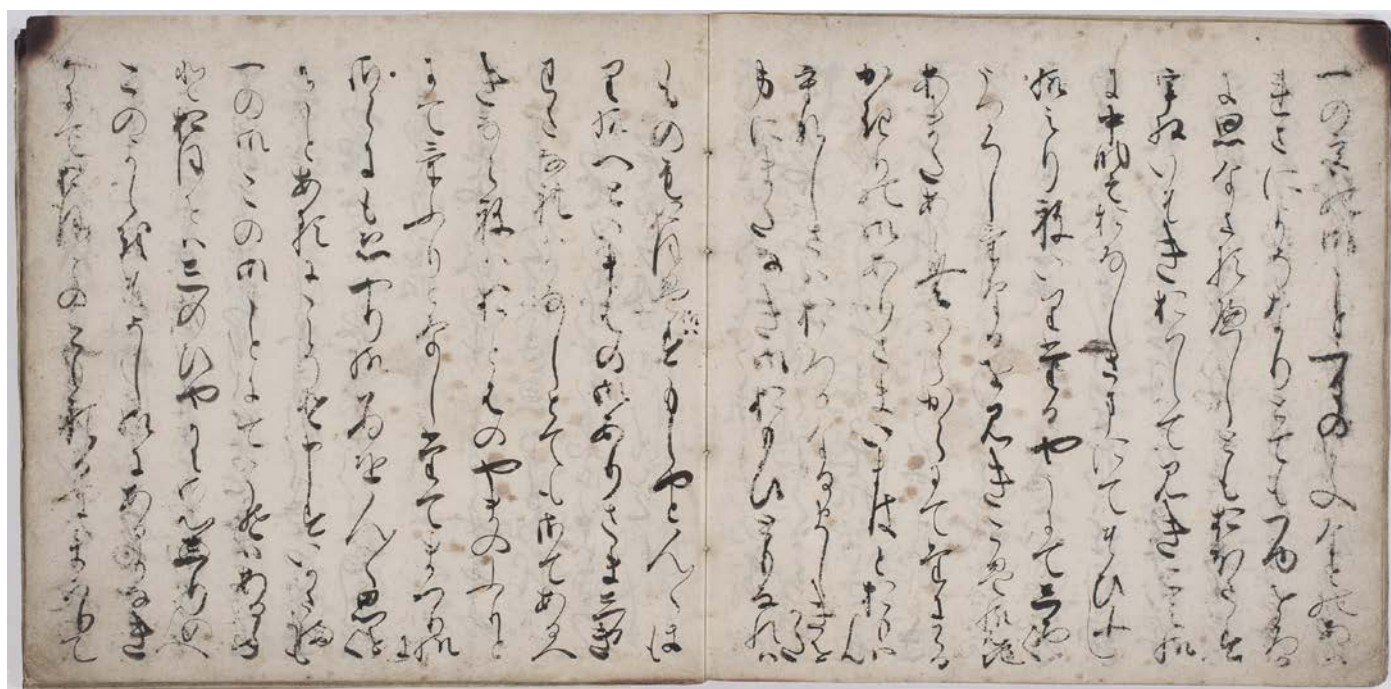
あさからずおぼしめさるゝに御ぞを

ひきかづきておほとのごもりぬさ

い将の中将にはさりともしいかでかさる

事あらんたしかなることきかせよ

とすくすくしくおほせられせども



一の宮の御こと一日の御文などのあは
れさによそなりとてもつゆをろか
に思なざるべしとおぼさず

宰相いそぎおはして見きこえ給
に中納言おなじさまにてそひふし
給えりねいりたるやうにてしろく
うつくしげなるを見きこえ給心地
あまたあらむはらからにてだにかゝる
かぎりの御ありさまいまはとおもはん
うれしさはおろかなるまじきをかた
身にまたなき御おもひともなれば

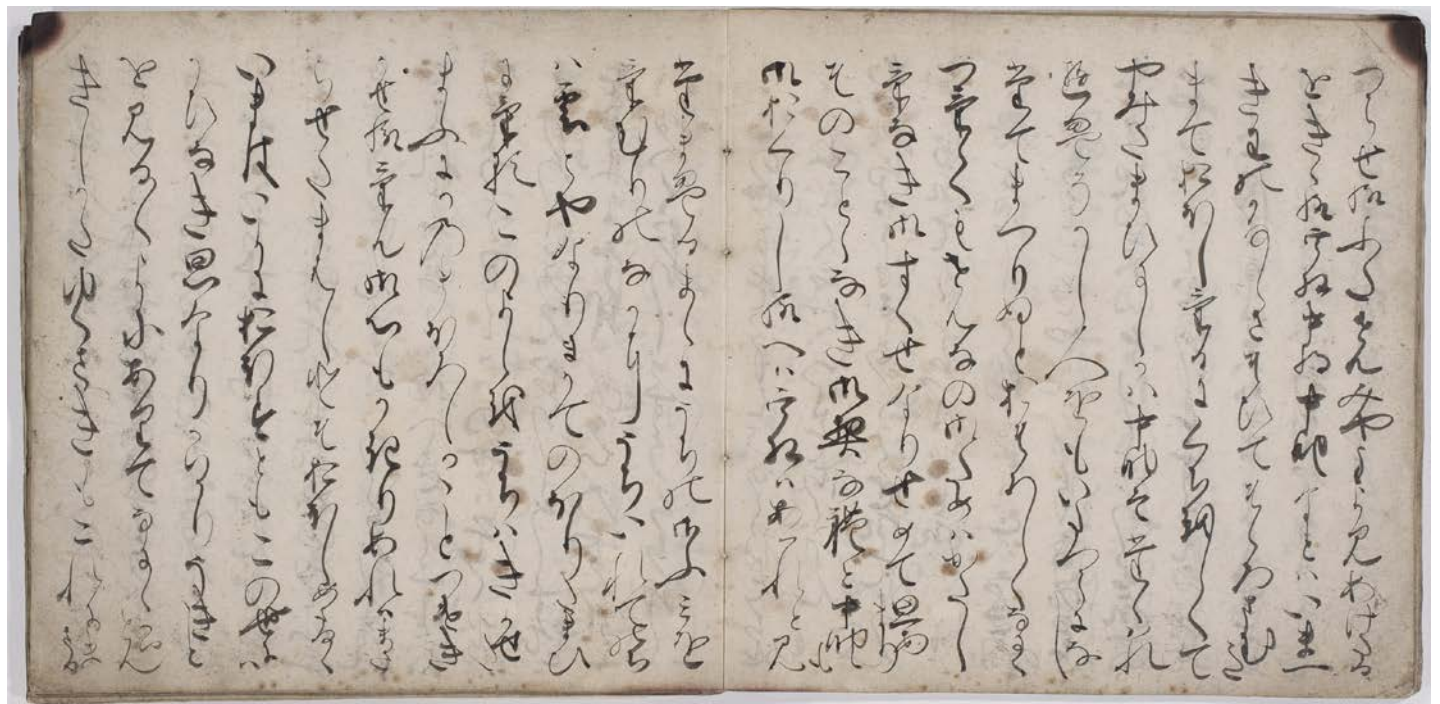
ものもおぼえずもしやと人々まも
り給へといまはの御ありさましるき
わさなればかなしとてもさてあるべ
きならねばおとはのやまのふもと
にてけぶりとなしたてまつり給に
さらにも急やり給はぬを人々思をく
一の御この御ことにてこそはあるらめ
とおぼせばしのひやかに御心しりの人
このよしをそうし給にあるかなき
かにておほとこのこもれるにまいりて

この世こそおもはずならねはちすはの
うゑをく露はへたてさらなん
あはれなることさまさまかゝせ給てふん
せさせ給てそのうゑにかゝせ給
契をきしこゝろもあればなきあとの
をくりこそやれむらさきの雲
きさきの宮のせむしかぶらせ給一の
みやの御ことおぼしめすにもなをあ
かすおぼさるてばいまひときはそふ
べし一の宮の御はゝなるによりて
そうくわう御宮とをくりたてま

この世こそおもはずならねはちすはの
うゑをく露はへたてさらなん
あはれなることさまさまかゝせ給てふん
せさせ給てそのうゑにかゝせ給
契をきしこゝろもあればなきあとの
をくりこそやれむらさきの雲
きさきの宮のせむしかぶらせ給一の
みやの御ことおぼしめすにもなをあ
かすおぼさるてばいまひときはそふ
べし一の宮の御はゝなるによりて
そうくわう御宮とをくりたてま

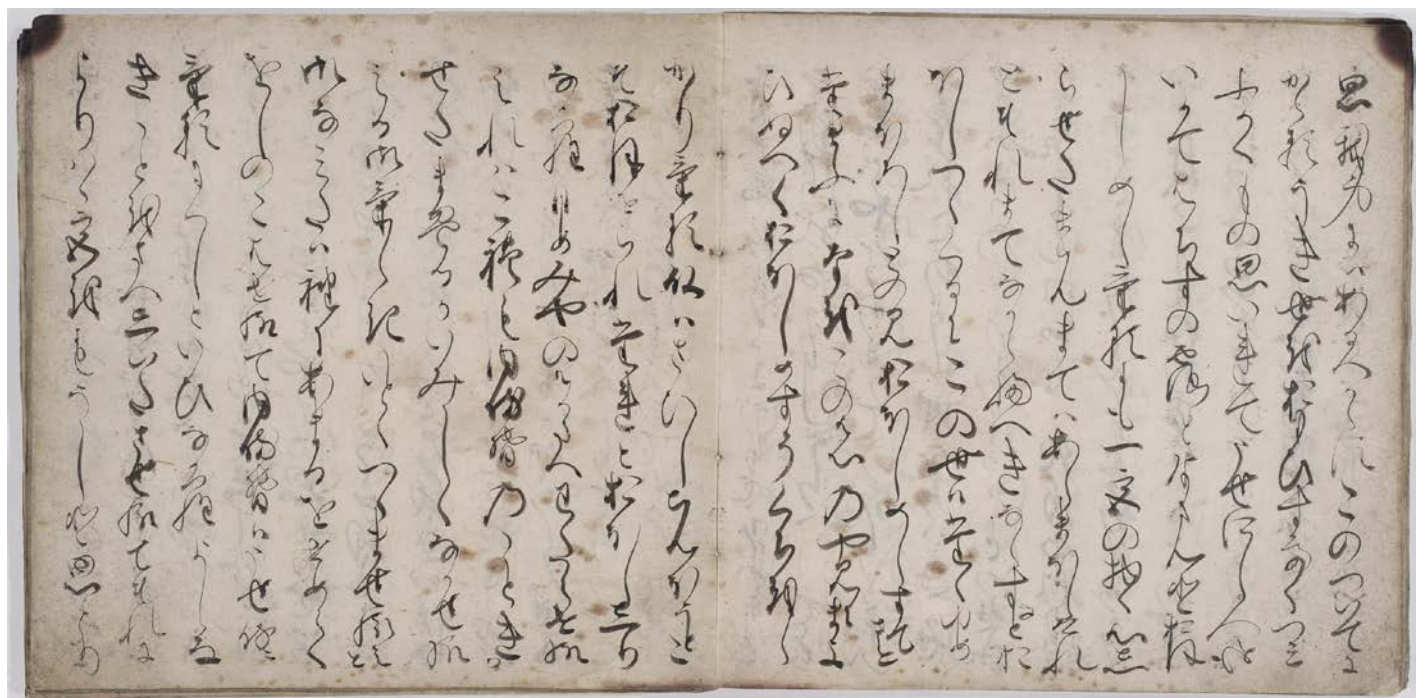
このよしを申になくなくいかなる
べきこととおほせらるゝに御文
などの候べきにこそと申にこの世
にてありしかへりごとをだにい
すなりにしにうれしきついでに
いふべきにこそとあはれにかなしく
なくなるかゝせ給

もえやらすむすほをるらむけぶりにも
たちをくるべき思ならぬを
みつせかはあふせありやといそぎつる
しての山地はわれもをくれし



つらせ給ふたせんみやうよみあけたる
をきゝ給宰相中将中納言などはいま一
きわのかなしさそひてそゝろさむき
までおぼしけるにくちをしくて
やみたまひにしかば中納言たゝはれ
ゆえそかし人をもいたづらになし
たてまつりぬとおそろしくなにゝ
つけてもをんなの御ためはかたじ
けなき御すくなりせめて思あまり
そのことゝなき御契なれと中納言も
御おくりし給へば宰相はあはれと見

たまえるまゝにうちの御ふみを
けむりのなかにうちいれてのち
は雲とやなりまかでのぼりたまひ
にけるこのよしをうちはきかせた
まふにかのまぼろしかことづけき
かせ給けん御心もかぎりあればまさ
らせたまはじとぞおぼしきるゝ
いまはいかにおぼすともこの世には
かひなき思なりかはかりうきこと
を見る見るよにありてなにゝかはせん
きしかたゆくさきもこれにまさる



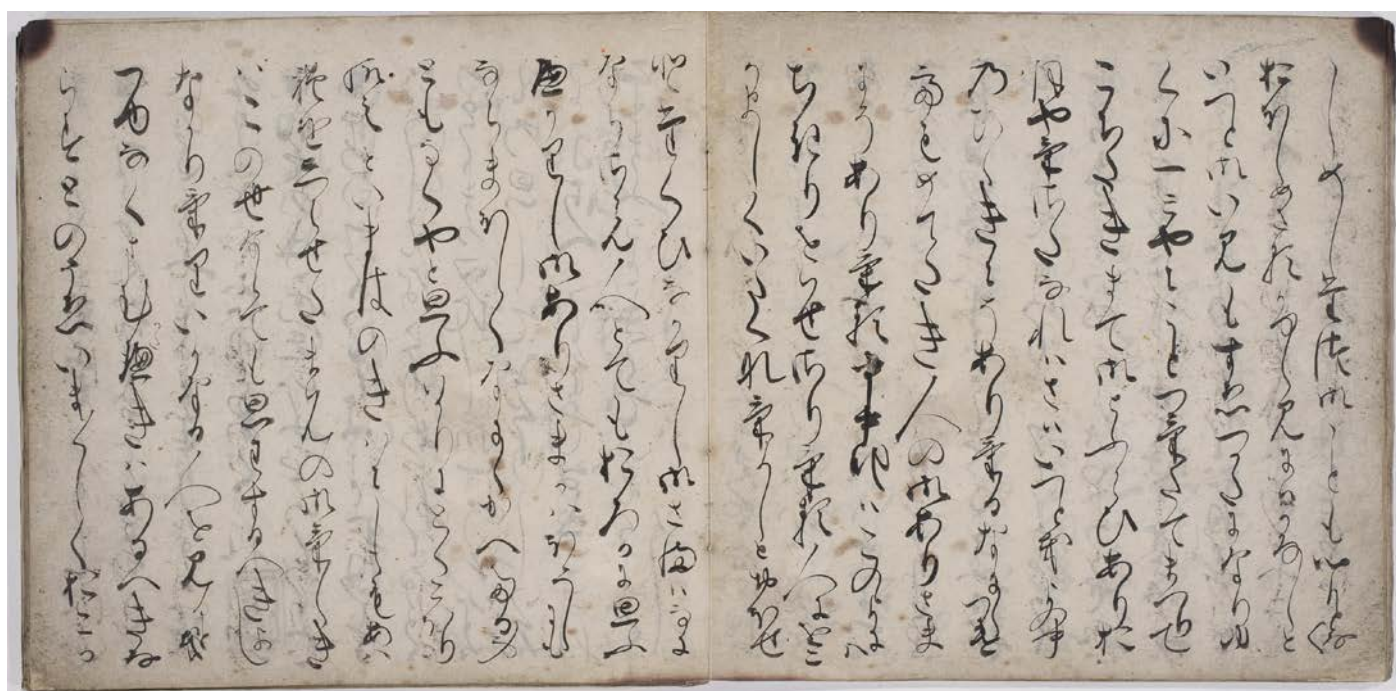
思我身にはあるべからずこのついでに
 かゝるうき世をおもひすてゝつみ
 ふかくもの思ひれてうせにし人をも
 いかではちすの露となさんとおぼ
 しめしけるにも一宮の物ゝ心し
 らせたまはんまではあらまほしけれ
 とそれまでながらふべきならずなとお
 ぼしつゝくるにこの世はたゝゆめ
 まぼろしとのみおぼしめしすてさせ
 たまふになをこの御心のやみにまよ
 ひぬべくおぼしめすぞくちをし

かりきられぬいづのうらみのよ
 せなけりしそまきとわたりそ
 あなれりや名のいふ人をもてをね
 くれはつねに内侍督のとき
 せすもあつちつみゝゝあせね
 ころめきりゝにゝつゝもをね
 けりゝゝ神ゝあつちとまゝく
 ゝのゝこゝをねて内侍督のとき
 せねゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まゝゑて人といふてはなかりぬ
いづき、いゝあつたやんをいへば
日々おそふにけいのつゝ
重なり、やうしてうゝの人は
かゝんとおもうやんの思ひ合せが
人の物をもとめようとする切なる心
我人もたゞ物のおやんをきくは
おひねりよりおせめても、物
いふもののおよぶかゝるんせふ
こゝろからいひてゐてあつた
まゝんとおもうてゐる。

きこえて人もいたづらになりぬるに
はうきことにあらずや見なれたりし
われらをだにつねはものつゝまし
けなりしをましてしらぬ人に

御けしきにいとゞみめみやも御袖し
ぼるばかりになりぬるををのづから
ちかく候人は見きこえたてまつる
になみだとゞめかたかりけりとのゝ
うゑ内侍督の事とものたまふわかみや
むかえたてまつりて一日ばかりおはし
けるきさいのくらひをくらせ給ける
ことなどこまかにきかせ給に中
納言はいかばかりあはれにおぼしめすらんと
おもふにわれをもうしとこそは
おぼしめさるらめとおほすうゑはおぼ



しめしたつ御ことも心もとなく
おぼしめさるふしみにはかなしと
いへど御いみもすゑつかたになりゆ
くに一みやにことづけたてまつりて
こちたきまで御とぶらひありお
ほやけきたなればさはいへともよの中
のひゞきにぞありけるなにとつけ
てもめでたき人の御ありさま
にぞありける中中納言はこのよには
ちぎりをはせざりける人にをこ
かましくいたくなげかしとおぼせ

とたくひなかりし御さまはなに
ならさらん人とてもおろかに思ふ
べかりし御ありさまかはほうしにも
ならまほしくなにとかへたる身
ともなくやと思ふばかりにとこほり
給えといまはのきはにしもあは
れをしらせたまはんの御氣しき
はこの世ならでも思わするべきよし
なかりけりいかなる人を見るとも
つゆなくさむべきはあるべきな
らずとのうゑいまいましておこが

ましくもありなにしにさて
はいつとなくおはすらんとかたがた
におたまふもことわりなる四十
九日にをのかおのおのあくがれたまふ
中納言のきのしのぶをつくづくと
ながめいでゝいまははとおぼす
かさしもなごりあはれになにゝ
めとゞまる心地し給すそろなる
もの思してをくりしいみ
なとにさへこもりてなきこがれ
たまふなときゝていまいましくよし

なきことなりみかどにはなかくひ
むなき物におもはれまいらせてと
おほせとわれらが心あはせてし
いでゝしことなればえかくも物
ものたまはずにめでたかりし
ありさまよの中の人このころ
あはれなるきたにそしける



ましくもありなにしにさて

はいつとなくおはすらんとかたがた

におたまふもことわりなる四十

九日にをのかおのおのあくがれたまふ

中納言のきのしのぶをつくづくと

ながめいでゝいまははとおぼす

かさしもなごりあはれになにゝ

めとゞまる心地し給すそろなる

もの思してをくりしいみ

なとにさへこもりてなきこがれ

たまふなときゝていまいましくよし

なきことなりみかどにはなかくひ

むなき物におもはれまいらせてと

おほせとわれらが心あはせてし

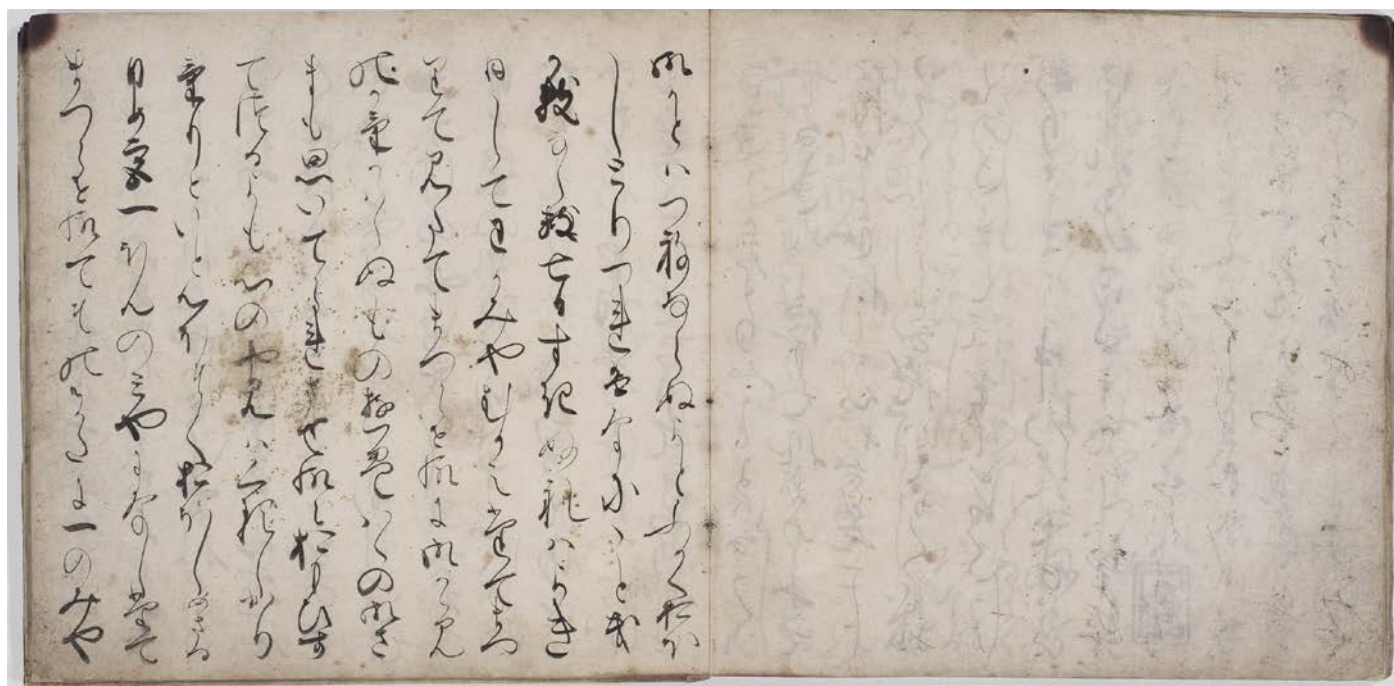
いでゝしことなればえかくも物

ものたまはずにめでたかりし

ありさまよの中の人このころ

あはれなるきたにそしける

印



御かとはつねならぬよとふかくおぼ
 しとりつれはなにことも
 かずならず七日すぎぬればよき
 日してわかみやむかえたてまつ
 りて見たてまつらせ給に御かゝみ
 のかけかはらぬものゆえはゝの御さ
 まも思いてられさせ給におもひす
 てつるよも心のやみはくるしかり
 けりといと心ほそくおぼしめさる
 ひめ宮一ほんのみやになしたて
 まつらせ給てその御かたに一のみや

おはしませうとまつらせ給
にわたしのあはれにもおろかにおほ
しめされんやはともすればいた
きあつかはせ給を中宮は心つきな
くおぼしめさるれとはゝのをは
せほこそはめさましからめいまゝて
まうけの君もをはしまさぬに
ひめ宮の御ためゆくすゑたのもしく
おぼしめしをきつるもさすが
にあはれにおほえさせ給へばおほし
もはなたれずみたてまつりなど

せさせ給にいまより氣しきこ
とにたゞうゑの御かほゝうつし
とりて又はゝかたさえそひなへて
ならぬさまを

まことにはやむすびあわせし忍草
などあやにくに露けかるらん
と思しられたまえとすきにし
かたのこひしくかなしければ御
めのとの宰相めしいでゝたれにもうし
とのみおもはれきこえにしかば
露のあはれもなさけもかけ給へ

はおはしまさせたてまつらせ給

にかたがたのあはれにもおろかにおほ

しめされんやはともすればいた

きあつかはせ給を中宮は心つきな

くおぼしめさるれとはゝのをは

せほこそはめさましからめいまゝて

まうけの君もをはしまさぬに

ひめ宮の御ためゆくすゑたのもしく

おぼしめしをきつるもさすが

にあはれにおほえさせ給へばおほし

もはなたれずみたてまつりなど

せさせ給にいまより氣しきこ

とにたゞうゑの御かほゝうつし

とりて又はゝかたさえそひなへて

ならぬさまを

まことにやむすびあわせし忍草

などあやにくに露けかるらん

と思しられたまえとすきにし

かたのこひしくかなしければ御

めのとの宰相めしいでゝたれにもうし

とのみおもはれきこえにしかば

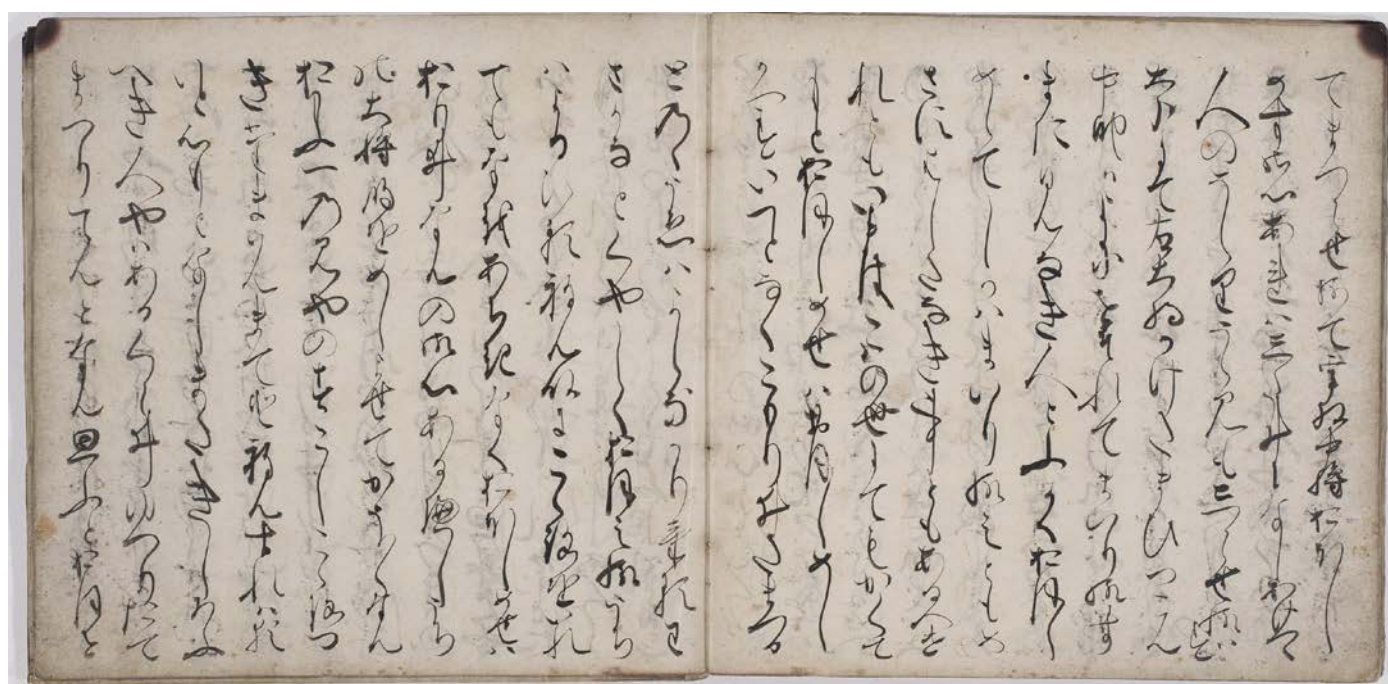
露のあはれもなさけもかけ給へ

しとはおもはねと月ころなれ
きこえしかばいまははと思ふは
いとなんかなしかりけりすきに
し御心たかへすしたてまつりし
をなき御心にはあはれとおぼしけるを
わが身にだにをこがましくしれしれ
しき名をもなかし侍りぬるに
思しる人も侍りぬべしよのつね
のまことの契にかくまでおもひまど
はんはことわりのことに侍りなん
心をはせん人は中々なとかあはれ

おかけ給はざるべきと心やりてなん
思侍とのたまふにこれにもなみだに
むせみて御かへりごとも申さず
おはしためらひてあさましかりし
御ありさまをあさからずおぼし
めしあつかひし御心ざしはなに
ごとをいかにともおもひわかれ候はず
かたじけなしとのみおもひ侍りしかと
もひごろはかくておはしますにこそ
思なぐさめて侍りつるをいまより
はなにゝいのちをかけ侍べきとぞ

のよりみきえぬへけなる
あはれとみ給のちの御
ことなどつれなくつらかりし御
事ともなくこまかにいとなみ
つるはありがたかりつる御心かなと
宰相中将もおろかならずおぼえ給
御ゆえにかくはかなくなり給ぬる
ぞかしとうらめしくおぼすも
それもさるべき契にこそとひこ
ろの御心のあはれさにおぼしめされ
けりすそろにむなしくなして

おぼすらん中納言の御心も心くるしく
あはれなり宰相もさてのみをは
すべきならねばなくとまる人
のことゝもさたしをき御はかへ
まいりなどして中納言殿ももろ
ともにいで給心地ともあへなくかな
しとおろかなり御かどは月日
のすぎゆくも心もとなくいそがしくのみ
おぼしめすにとしもかへりぬれば
又きしろふべき人やあるべきと
おぼしめせば二にて春宮にすへた



てまつらせ給て宰相中将おぼし
めす御心あれはしたゐになしあけつゝ
人のそしりうらみもしらせ給はず
大臣にて右大将かけたまひつこん
中納言はよにをそれてまいり給はず
またひんなき人とふかくおぼし
めしてしかばまいり給えともめ
さすはしたなき事ともあるべけ
れどもいまはこの世にてもかくて
もおぼしめせばおぼしめし
かへすいつとなくこもりゐたまへる

とのゝうゑはよしなかりけるわ
さかなとくやしくおぼえ給うち
はよるひるねん仏にこゝろをいれ
てもなをあぢきなくおぼしめせば
おりゐなんの御心あるべしうち
の大将殿をめしよせてかうかうなん
おもふ一のみやのすこしこゝろつ
きたまはんまでとねんすれば猶
いと心もとなしまたきしろふ
べき人やあるくらゐゆづりたて
まつりてんとなん思ふとおほせ

あつていふにわたりたるに
だよりなくしてむすむすに
一のやうにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに

あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに
あつていふにわたりたるに

らるゝにいかにおぼしなるにかと
おもふにかなしくてむげにいまだ
一のみやはいはけなくおはしますに
うえに御よいまだすゑにならせた
まはぬにいかでさる事と申
給えばさらなりおぼろげに思はん
に人のそしりもありむつきの
うゑなる人にゆつらむと思なんや
心あさくもいはるゝかななどお
ほせられてにわかには御くら
あゆづりありて内大臣関白し

たまふかたわらいたくいかゞとを
ぼしたれとこの一のみやをそこ
よりほかにあはれとおもひたてまつ
るべき人さらになしわれとても
一のひとのすぢにてあらずばこゝろ
はあらめいまの御かどはひとへにき
みにあづけてんすおさなくて
まつりことしたまはざらん程は
一ほんのみやに申あわせてしむか
おこがましからずひたうまつり
ごとなくよくよくうしろみたて

うしれはなんにまふあつもの
へいんちうへのやふいそがしげに
おぼせられをくことゝもたゞ内侍
かみのゆかりと見ゆかくにわか
くにゆづりなどのあるをだれも
あえなくめでたかりつる御よを
とあさましきたみにいたるまで
もてかなしみたてまつることかぎ
りなし一ほんの宮にわれいかに
なり侍りぬともけうやうともおぼしめして
うちにはなれたてまつらせ給は

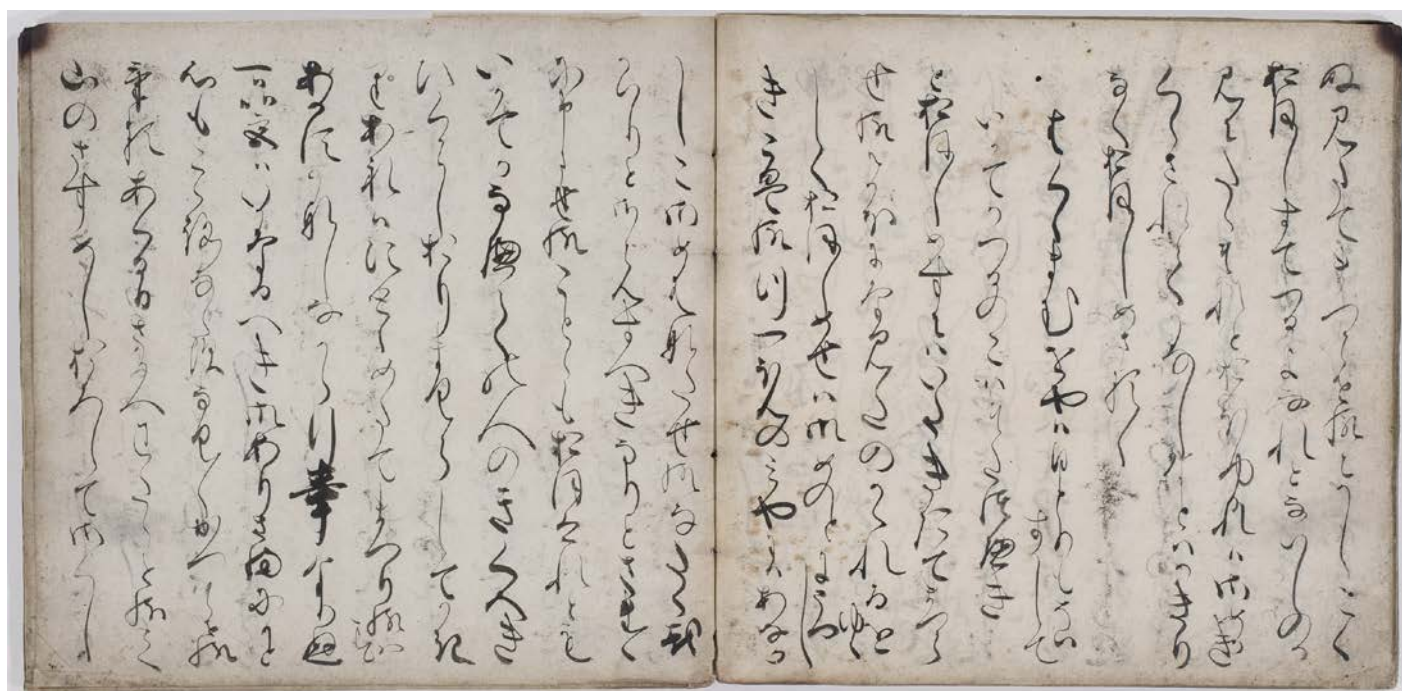
ともちゝともきみひとりをたのみ
たてまつるべき人にこそあめれ
むげにをさなからん程は女御たいにて
君せつしやうとよのまつりことはせ
させ給えかしなどぞ申させ給さか
に御くわんありければそれへわた
らせ給て御さまかへんとおぼし
めしたちてはいまははとおぼしめすに
はさすがに一品宮の御こともとおほ
せは中宮いまは女院とぞきこえ
給いま一とのたいめんなからんもくち

まつられよなんとけふあすもの
へいかんする人のやうにいそがしげに
おぼせられをくことゝもたゞ内侍
かみのゆかりと見ゆかくにわか
くにゆづりなどのあるをだれも
あえなくめでたかりつる御よを
とあさましきたみにいたるまで
もてかなしみたてまつることかぎ
りなし一ほんの宮にわれいかに
なり侍りぬともけうやうともおぼしめして
うちにはなれたてまつらせ給は

ともちゝともきみひとりをたのみ
たてまつるべき人にこそあめれ
むげにをさなからん程は女御たいにて
君せつしやうとよのまつりことはせ
させ給えかしなどぞ申させ給さか
に御くわんありければそれへわた
らせ給て御さまかへんとおぼし
めしたちてはいまははとおぼしめすに
はさすがに一品宮の御こともとおほ
せは中宮いまは女院とぞきこえ
給いま一とのたいめんなからんもくち

[illegible]

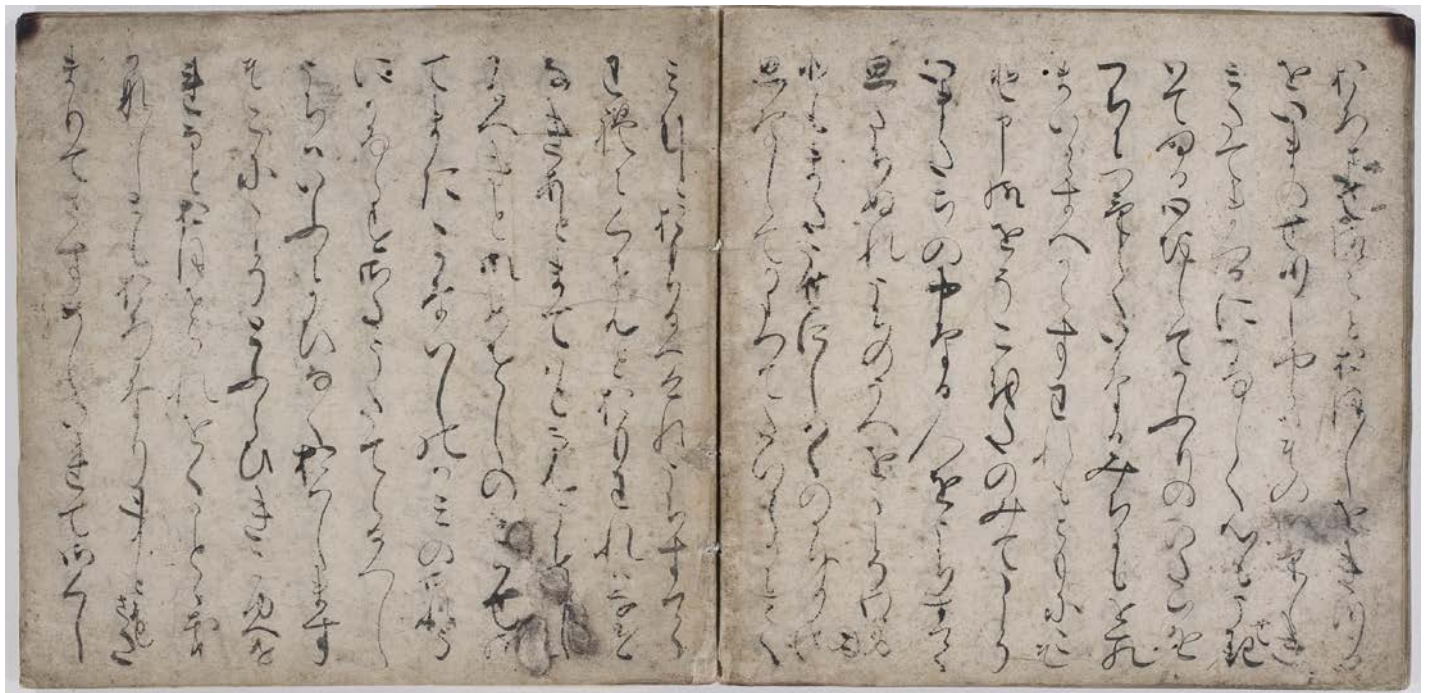
人のと申こともおぼししることも侍りなん一ほんのみやひとゝころおはしますもかぎりすくなきことにて侍りうちのうゑをいまは我かはりとも御ことも思て心をく事なくて思はくゝみ「た」てまつり給などさまさまにあはれることゝもをきこえあかしてあくる日ぞかへらせたまふいかにおぼしなるにかとあはれにおぼさるそのつぎの日一ほんの宮くしたてまつりてきやうかうなり



ぬ見たてまつらせ給にかしこく
おぼしすてつるよなれとないしのか
みにたゞそれとおぼゆれば御めかき
くらされてかなしなとはかぎり
なくおぼしめさるゝ

はぐくまむをやはひとりもそはずして
いかでかつるのこはそだつべき
とおぼしめすにはいだきたてまつら
せ給御かほになみだのかゝれるをゆゝ
しくおぼしめせば御めのとにうつし
きこえ給つ一ほんのみやにはあなか

しこ御めはなたせ給なたゞ我
かはりと御らんずべきなりとさまさま
に申させ給ことゞもおほけれども
いかでかなへての人のきくべき
ひぐらしおりまくらしてかき
りあらばえとゞめたてまつり給はず
あかずかなしながら行幸なりぬ
一品宮はいかなるべき御ありさまにかと
心もこゝろならずなくなくかへらせ給
けるあくる日さかへわたらせ給て
山のさすめしおろして御ぐし

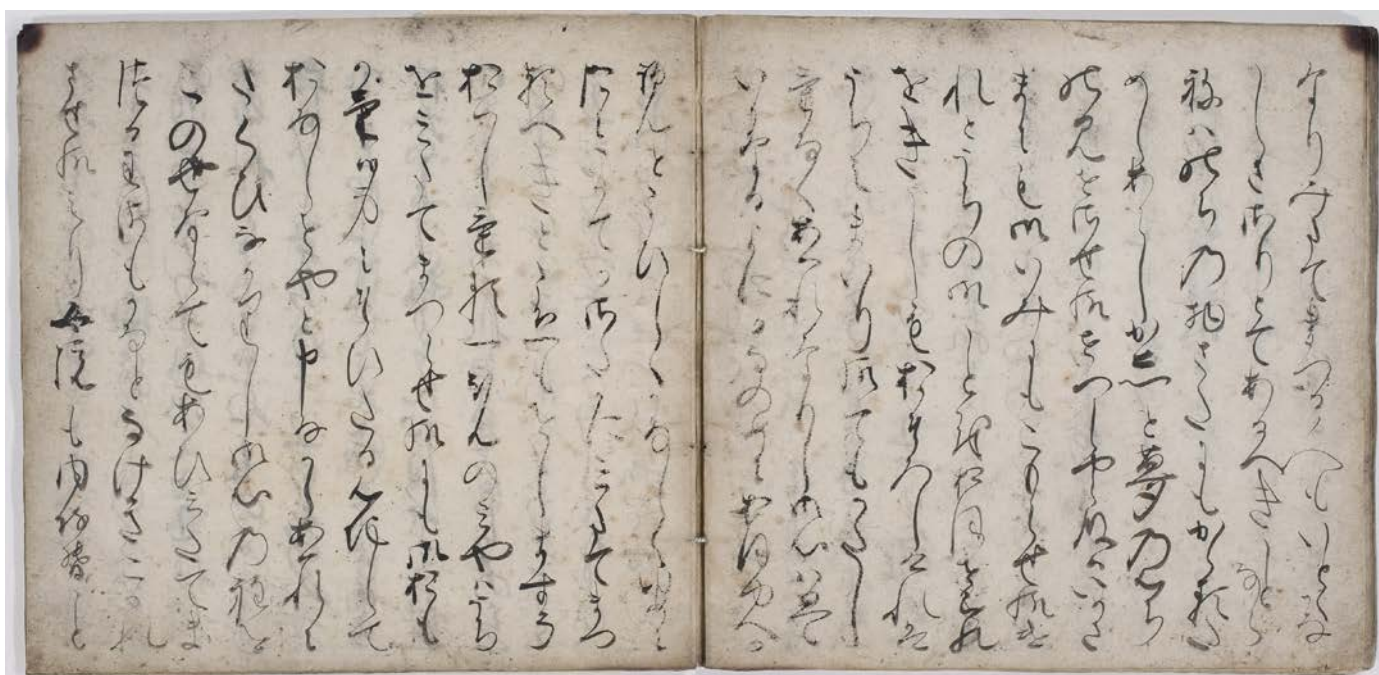


おろさせ給えとおぼしをきつる
 をいまのせつしやうはその御けしき
 みたてまつるにかなしく心もう（せ）き
 はてぬる心地してかふりのひたいを
 つちにつけていかなるみちにもをくれ
 まいらすべからずわれもともにこそ
 と申給をそこをたのみてこそ
 いまたちの中なる人をうちすてゝ
 思たちぬれうちのうへをこそわかるの
 ともまたうせにしはゝのかはりとも
 思なしてかまへてたいらかにて

みむとおもはるべけれうちすてゝ
 われにくせんとおもわれはなかなか
 なきあとまではとなんうらめし
 かるべきと御めをしのこはせ給
 てまたこないしのかみの御れう
 にならず御たうたてらるべし
 うちはいふにかひなくおはします
 そこにこそとふらひきこゆべけ
 れなどおほせられをくことども
 かなしとおろかなり事どもさだ
 まりてきすめしいれて御ぐし

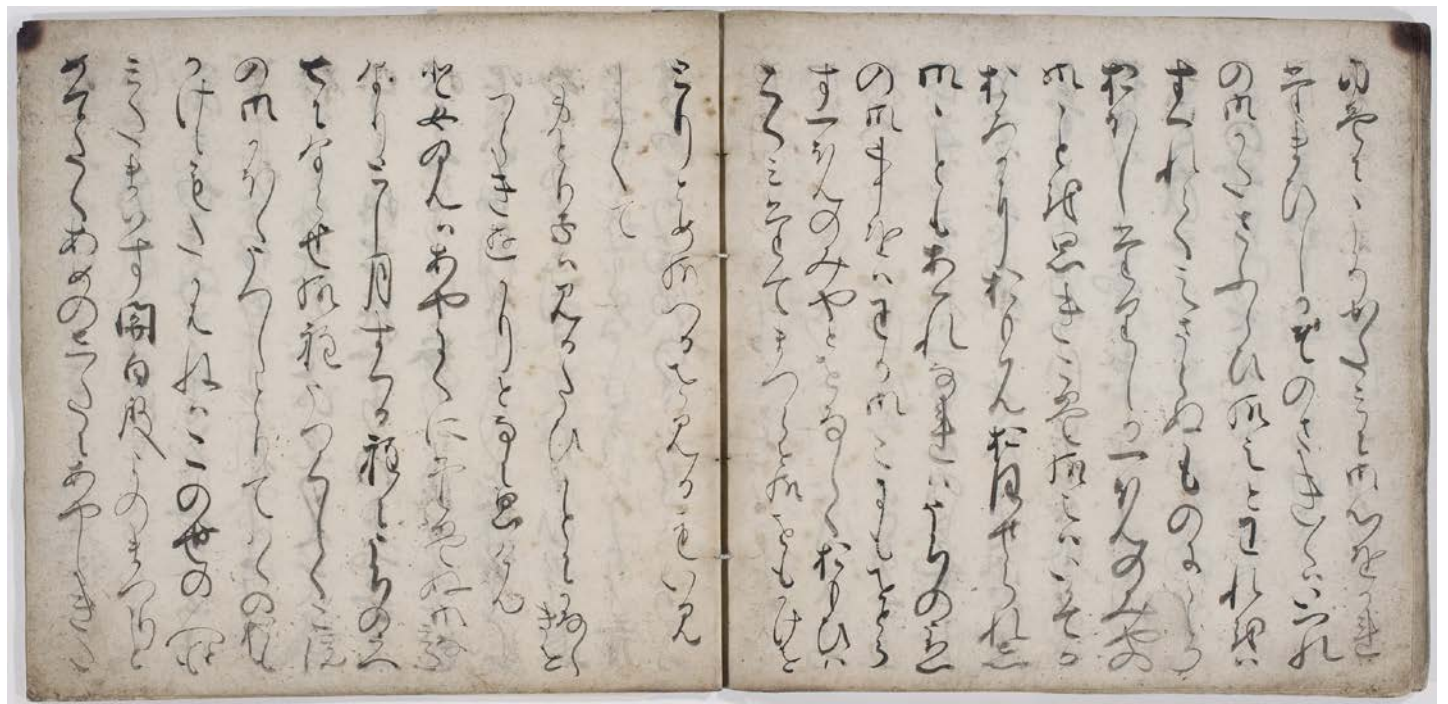
やしくて御しやうしをひき
あけて見させ給にさらにをはし
まさすなをいかなることぞとこ
かしこみたてまつるにをはしまさず
せつしやうどのはなきほれてかた
すみにあたまへるにかうかうとの
たまへば物もおぼえ給はずいか
てかさることのあらむとみな人
あきれまどひたりはてはから
をだにとゞめすならせ給ぬるめ
つらかにこそそくしんしやうぶつ

といふことありときけ又見き
かさりつることをさにこそをはす
めれとめでたうたうとき物からあへ
なしともおろかなり一ほんの宮女
院なときかせ給御こゝろともおろか
ならんやは御さまのかはらせたまふ
だにあさましくかなしと思つるに
さながらもよにおはしますべし
とおもひつれ御からをだに見ず
しらずなりぬる事とせつしやう
殿はなきたまふさまことわり



なりてみたてまつる人もいとかな
しきさりとてあるべきことなら
ねばのちの物さたにもかゝるた
めしあらじかしと夢の心ち
のみせさせ給せつしよ殿はいかさ
まにも御いみにもこもらせ給け
れどうちの御ことをおぼせられ
をきしもおそろしければ
うちえまいり給てもかたじ
けなくあはれなりし御心ばえ
いかなるよにかなのめにおぼゆへか

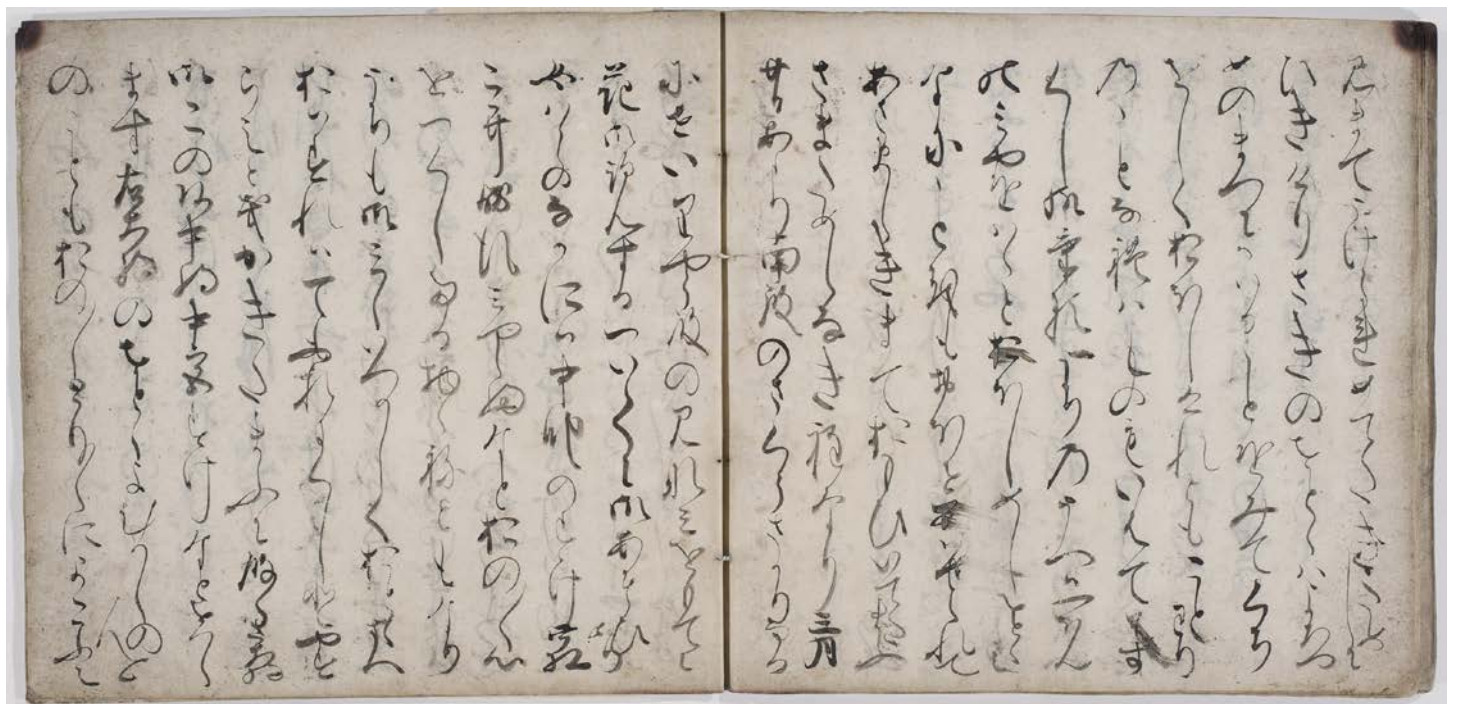
覧とこひしくかんしくゆめに
だにいかでかきたかにみたてまつ
るべきとこゑもをしまずぞ
おはしける一ほんのみやはうち
をみたてまつらせ給にも御おも
かげ御身にそひたる心地して
おなじをやと申ながらあはれに
たぐひなかりし御心の程を
この世ならでもあひみたてま
つるわざもかなとなげきこがれ
させ給えり女院も内侍督こと



ゆえにこそかたみに御心をかれ
 たまひしかそのさきざきはいづれ
 の御かたさぶらひ給えとわれをば
 すぐれてえさらぬものにこそ
 おぼしたりしか一ほんのみやの
 御ことを思きこえ給えばいかでか
 おろかにおもはんおぼせられし
 御こともあはれなればうちのうゑ
 の御事をばわが御こにもをとら
 ず一ほんのみやとをなじくおもひは
 ぐゝみたてまつらせ給をもかげを

とりとめ給へるを見るもいみ
 じくて

みどり子を見るたびごとになしきを
 つらきゆかりとなに思けん
 と女あんなはあやにくにたえぬ御なみだ
 なりとし月すぐる程にうちのうへ
 七にならせ給程うつくしくこ院
 の御かほゝうつしとりてはゝのおも
 かげにもたがはねばこの世の人とも
 みたまはず関白殿よのまつりごと
 めでたくあめのしたにあやしきた



みまでうけられめでたきために
 ひきけりさきのをとゞはよろづ
 めのまへにかはることをみてくち
 をしくおぼしけれどもことわり
 のことなればものもいはて「そ」す
 くし給けるうちのうへは一ほん
 のみやをはゝとおぼしめし「を」とゞに
 なにごともおほせあはせられて
 あさましきまでおもひいでたまふ
 さまためしなき程なり三月
 廿日あたり南殿のさくらさかりなる

にせいりやう殿のみなみをもてに
 花御覧するついでに御あそびあり
 女はらのなかには中納言のすけ宰相
 こ弁侍従みようぶなどおのおの心
 をつくしたる物々のねともなり
 うちも御みゝいつかしくおとゞさへ
 おはすればてふれにくしとやす
 らえともかきたまふに殿々左大将
 御この頭中將中宮すけなどをはし
 ます右大将のをとゞよむかしの人々
 のこともおのおのとりどりによこふえ

しやのふゑとふまゝに
おもしろきよのめを
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて

おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて
おぼへておぼへて

しや「ら」のふゑなどふきたまふ
いとおもしろきよの御あそびなり
それにつけてもおとどはむかし
こひしくおぼしてうちし
ほたれたまふしはてゝいづる程
のろくともおのおのめでたし女は
うのさうそくほそなかなとし
たるべしうちのうへ御くしのう
つくしげに御あそばさるに
はしりあそばせたまふに一ほん
のみやの御かたにおはしましたるに

みやあなうれしと御らんして
あはれこなしのかみにもよく
にたまえるかなとおほせらるれば
こゐんの御よに候し中納言のすけ
うちなきてさればこそこゐん
も御身もうせたまひにしかなく
おぼさなき御みゝにきこし
めししりて御めになみだをう
けておはしまたもあはれに御ら
んして御袖もしばれぬめり
おとどまゐりたまえるに

